

## 審査の結果の要旨

氏名 王 瑋

本論文は、中国と日本における自然風景の見方について、中国由来の風景鑑賞方法である八景を対象に、その傾向と特徴を比較分析し、中日の共通点と差異を明らかにした研究である。

これまで、八景に関する研究は主として人文科学の分野で行われ、その地理的分布、文学的もしくは芸術学的解釈、文化的背景に関する考察、著名な八景を対象にしたケーススタディなどの成果が見られる。しかし、八景の全容を俯瞰的に調査してデータとして整理したうえで、中国と日本の客観的な比較を試みた既往研究は、例を見ない。

本論文は、全6章で構成されている。

第1章は序論として、八景の紹介と研究の目的、既往研究の整理と本研究の位置付け、方法論の説明に充てられている。はじめに、10世紀に中国で生まれた八景が中国で発展し、平行して日本と韓国にひろまり、その後とくに日本において大衆化していく過程を概略示したうえで、中国と日本を比較することの意義を述べている。とくに、八景を構成する個々の風景の記述様式は、地名を表す前の漢字二文字と、風景の様態を表す後の漢字二文字、計漢字四文字からなるが、このうち、後の二文字（第三文字と第四文字）の組み合わせに着目することによって、自然の風景にたいしてどのように意味づけや価値付けがなされているかを客観的に分析しようとしている点は、本研究独自の着眼点であり、高い新規性が認められる。

第2章では、中国と日本の八景の全容を概観してその特徴を述べている。八景の元祖は10世紀中国で成立した瀟湘八景であり、これが八景の原形である。後者二文字（第三文字と第四文字）の漢字の組み合わせに着目すると、その後の中国の八景は概して、原形のバリエーション、あるいは原形とは異なるオリジナルな創作としての八景が大部分を占める。一方で、14世紀に瀟湘八景が伝わった日本においては、中国をうわまわる数の八景がその後詠まれていくが、原形を忠実にコピーしながら地名のみを日本のものに置き換えたものが半分以上を占めており、創作を主とする中国の場合とは対照をなすことが指摘されている。

第3章では、第2章で明らかにした中日の八景の相違を、歴史的パースペクティブから記述している。そして、日本における八景の受容と大衆化のプロセスは、瀟湘八景のイミ

テーションの段階、創作型が流行する段階、ふたたび瀟湘八景型がもりかえす段階、の三段階として理解できることを述べている。そのうえで、本研究では中国と日本の創作型を比較対象とすることによって、両国の自然風景にたいする意味づけの傾向と特徴を客観的に分析できることを述べている。

第4章と第5章は、八景の後者二文字の漢字の組み合わせをデータとして中日の客観的比較とその分析考察を試みた、本研究の核心をなすパートである。まず第4章において、鑑賞の対象を表す語である第四文字を、気候、天体、植物、動物・昆虫、水、山の6カテゴリーに分類し、同時に鑑賞対象を修飾する語である第三文字を、自然の事物、時間や季節等の状況、属性、動きの4カテゴリーに分類して、分析の枠組みを示している。その枠組みを用いつつ、中国と日本における、第三文字と第四文字の組み合わせの共通点と相違点をきめ細かく洗い出している。

第5章は、前章の比較結果をもとに、中日の傾向と特徴を考察した章である。そのなかで、月は中国ではネガティブな感情の表現として詠まれるが日本では逆であること、花に関する嗜好の差異、日本では多く詠まれる鳥や昆虫（の声）が中国の八景ではほとんど見られないこと、また山水の表現について、中国では河や泉、湖等の水面が好んで詠まれるが日本では山が主な鑑賞の対象となっていること、などが述べられている。

最後に第6章において、結論が述べられ、八景に見られる中日の自然風景鑑賞の傾向と特徴について、あらためて整理して述べている。

八景を扱う既往の研究は、文献史学、地理学、文学論や芸術論などの方法論を援用したものがほとんどであったといつてよい。一方本研究は、八景の記述様式である漢字四文字の組み合わせをデータとして扱い、客観的なアプローチで八景の全体像を明らかにするとともに、中日の比較を試みた点で、方法論と成果ともに高い新規性が認められる。景観学とりわけ伝統風景の研究分野にあらたなスコープを提供しており、社会基盤学および工学に対する寄与は大きい。

よって本論文は、博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。

以上